

10 育児不安・負担感に関する分析手法の開発へ向けて： 21世紀出生児縦断調査第1～7回より

相馬 直子

はじめに

現代の日本の母親が、育児に関して、不安・負担・ストレス等を抱えていることは広く社会問題となってきた。以下に述べるように既存調査からも、「専業主婦の方が就業女性よりも育児不安が高い」と指摘され、とくに専業主婦の育児負担・不安感の緩和、在宅子育て支援が政策課題となってきた経緯がある。

従来の調査では、一時点の育児不安感や負担感の度合いが測定され、育児不安をめぐる議論もそういった一時点の調査結果をもとに議論されてきた。21世紀出生児縦断調査というパネル調査を用いると、子どもが成長するにつれ、母親の育児不安や負担感がどう変化するのか、負担感が高い母親の特徴は何なのか、子どもが成長するにつれての変化を読み解くことができる。

本稿は、出生児縦断調査第1～7回をもとに、母親の育児不安・負担感の変化の特徴を明らかにすること、ならびに、育児不安や負担感に関する分析手法の検討を行うことを目的とする。

1. 先行研究の概要

(1) 概念設定・方法

先行の調査研究では、「育児不安」「育児負担」「育児ストレス」「育児の悩み」と概念が混在して使われているのが現状であり、その使われ方や意味内容は調査によって必ずしも同じではない。

日本における育児不安研究の第一人者であり、1980年代から育児不安調査を重ねてきた牧野カツコは、育児不安概念の意味やその測定方法について、次のように論じている。

まず、育児不安概念そのものについてである。育児不安とは、「期待」と「実現水準」とのズレから生じる。すなわち、「育児における<不安>は、この将来あるいは育児の結果に対する漠然とした恐れを意味しており、それは対象（理由）のはっきりしない非合理的なものであったり、無力感や疲労感などを伴っている」としたうえで、不安が生じるところの「期待」と「実現水準」のズレ、すなわち、「不安は親の方が感じるものであるから、親に向けられる期待と、親が実現している育児の現実とのズレ」に着目する¹。その後牧野は同概念の再検討を加えるなかで、「育児不安の概念も、過度の母子一体（接近）の感情とイライラや子ども嫌い（離反）の感情の両極性をもつものであり、ともに“育児における負荷事象”である」ことを強調している²。

次に、育児不安の測定方法についてである。理論的には、不安の構造面からの測定、不

¹ 牧野カツコ（1981）「育児における<不安>について」『家庭教育研究所紀要』No.2, 43頁。

² 牧野カツコ（1989）「<育児不安>の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』No.10, 25頁。

安に関連する問題からの測定、事例からの測定が考えられると論じている。具体的には以下の通りに分けられる。

1. 不安の構造の面からの測定
 - 1) 不安の内容（育児上の何に不安を感じるか）
 - 2) 不安の方向（過去、現在、近い将来、遠い将来、等に対する不安）
 - 3) 不安の強さ（自覚の程度、訴えの程度）
 - 4) 不安の深さ（一時的、慢性的、蓄積的）
2. 不安に関連する問題からの測定
 - 1) 不安に伴う生理的徴候から（緊張亢進、育児に対する疲労感、不眠など）
 - 2) 期待水準と実現水準についての認知とそのズレから
 - 3) 不安のない状況から（育児への自身、安心感、満足感、充実感の存在の有無）
3. 事例からの測定
 - 1) 遡及的な把握（子または親の問題行動の原因・背景を不安の側面から再チェックする）
 - 2) 予見的な把握（訴えられた育児不安はどのような条件で軽減または増加するか）³

さらに、指標としては、「一般的疲労感」「一般的気力の低下」「イライラの状態」「育児不安徴候」「育児意欲の低下」に分けた以下の 14 指標が提示されてきた⁴。

<p>I. 一般的疲労感</p> <p>①毎日くたくたに疲れる</p> <p>②朝、目ざめがさわやかである</p> <p>II. 一般的気力の低下</p> <p>③考えごとがおっくうでいやになる</p> <p>④毎日はりつめた緊張感がある</p> <p>⑤生活の中にゆとりを感じる</p> <p>III. イライラの状態</p> <p>⑥子どもがわずらわしくてイライラしてしまう</p> <p>⑦自分は子どもをうまく育てていると思う</p>	<p>IV. 育児不安徴候</p> <p>⑧子どものことでどうしたらよいかわからなくなることがある</p> <p>⑨子どもは結構一人で育っていくものだと思う</p> <p>⑩子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない</p> <p>V. 育児意欲の低下</p> <p>⑪自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう</p> <p>⑫育児によって自分が成長していると感じられる</p> <p>⑬毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う</p> <p>⑭子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う</p>
--	---

他の研究結果もふまえながら同指標を再検討する中で、牧野は次の 3 点を指摘する。第一に、「③考えごとがおっくうでいやになる」を除いて、「一般的疲労感」と「一般的気力の低下」を測定する項目は、相対的にあまり良い指標ではないようにみえること。第二に、「子どもが好きでない」「子どもが足手まといに感じられる」などの拒否的感情を加える方がより適切であること。第三に、＜育児不安＞得点が低いことは負荷事象が低いことであり望ましい状態であることをより明確にするために、ポジティブな項目として、例えば「子どもがとても可愛い」「子どもを育てるのは楽しい」など、子育てにおける健康な充実感と幸福感が測定できるような工夫が必要である⁵。

³ 牧野カツコ (1981) 「育児における＜不安＞について」『家庭教育研究所紀要』No.2, 43-4頁。

⁴ 牧野カツコ (1989) 「＜育児不安＞の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』No.10, 26頁。

⁵ 牧野カツコ (1989) 「＜育児不安＞の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』No.10, 26頁。

(2) 先行研究の検討

育児不安や負担感の実証分析は近年多くなされている。本稿では以下の6つの先行研究に焦点をあて、そのポイントを挙げる。

第1に、上記で述べた1980年代に実施された牧野による一連の調査がある。この調査では、育児不安の程度と子どもの年齢、数、家族形態などとは関連がみられないこと⁶、育児不安に影響を与える要因として、父親の協力や母親のネットワーク（母親自身の社会的な人間関係の広さ）が挙げられている⁷。

第2に、大日向雅美による一連の調査からは、高学歴になるほど母親役割の受容に消極的・否定的になることが示されている。たとえば、「子どもを育てることが負担に感じられる」について、中学卒・高校卒・短大卒・大学卒以上と比べたときに、大学卒以上が22.8%、短大卒が11.2%、高校卒が14.5%、中学卒が12.5%と、大学卒がもっとも高くなっている。一方で、子どもへの密着化傾向は、低学歴の母親やパートにおいて強いことが示されている⁸。さらに、就業別にみると、無職（専業主婦）は母親役割の受容に対して積極的・肯定的である反面、育児に専念することで世の中から送れることや視野が狭くなることを懸念する傾向があり、常勤にくらべて母親役割受容に葛藤が多いこと。パートは無職と同等あるいはそれ以上に、育児に専念することによる焦燥感が強いこと。家事・育児に支障のない範囲内で選ばれた仕事は、結局仕事内容そのものにも満足しきれない結果を招いているものと思われ、パートにこそ育児や仕事に対する焦燥感が強くあらわれる傾向があることが指摘されている⁹。

第3に、原田正文による大阪(1980年)と兵庫(2003～2004年)における詳細な調査レポート¹⁰が挙げられる。「大阪レポート」の調査は、大阪府下A市で1980年1月1日～12月31日の間に生まれた全数児、約2,000人対象とし、乳幼児健診（4か月児健診、6か月児健診、10か月児健診、1歳6か月児健診、3歳6か月児健診）と小学校入学後健診として小学校1年生の6月にアンケート調査を実施した経年調査である。「兵庫レポート」の調査は、2003年から2004年にかけて、兵庫県H市、大阪府I市で実施された。

本稿との関連で、この両調査のポイントを挙げれば次のようになる。育児の心配は子どもの成長とともに内容を変えながら消えることなく続き、育児での不安や心配な時期には、2つのピーク（退院～1・2ヵ月と、1歳前後から以降の時期）があること¹¹。育児不安の要因としては、①母親が子どもの要求を理解できないこと、②母親の具体的な心配事が多いこと、およびその未解決放置、③母親に出産以前の子どもの接触経験や育児経験が不足していること、④夫の育児への参加・協力が得られないこと、⑤近所に母親の話し相手がい

⁶ 牧野カツコ(1982)「乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉」『家庭教育研究所紀要』No.3, 34-56頁。牧野カツコ(1984)「中学生をもつ母親の生活と意識」『家庭教育研究所紀要』No.5, 37-48頁。

⁷ 牧野カツコ(1989)「〈育児不安〉の概念とその影響要因についての再検討」『家庭教育研究所紀要』No.10, 23-31頁。

⁸ 大日向雅美(1986)『母性の研究』川島書店、146-9頁、163頁。

⁹ 同上、150-2頁。

¹⁰ 原田正文(2006)『子育ての変貌と次世代育成支援：兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防』名古屋大学出版会、67-8頁より。

¹¹ 同上、173-5頁。

ないこと¹²、⑥イメージしていた育児と現実との大きなギャップの存在、⑦自分の育児に自信がもてない、⑧子どもにどうかかわっていいかわからない、⑨よその子と自分の子とを比較して気にする、⑩自分の育児に対する人の目が気になる、⑪育児についての努力を誰もほめてくれない、⑫自分の思い通りにものごとをすすめたい¹³、という点が明らかになっている。なお、原田の調査では、家庭の経済状況と母親の育児不安とは特に相関がみられない結果となっている¹⁴。

ちなみに原田は分析のなかで、不安と負担感を分けて考察している点が興味深い。すなわち、育児不安が結果としてもたらすものとして、負担感やイライラ感を挙げている。育児不安が結果としてもたらすものと考えられる項目としては、体罰の多用・育児でのイライラ感、育児での負担感、好ましくない親子関係、子どもから離れたたい、産まなければよかった、という点を挙げている¹⁵。

第4に、こども未来財団「子育てに関する意識調査事業調査報告書」が挙げられる。この調査から、「いわゆる専業主婦の方が共働き世帯の妻よりも、子育てに対する負担感を感じている人が多い」という結果が出ており、このデータは各自治体の次世代育成支援行動計画でも多く引用されているデータである¹⁶。この調査では、育児負担感の以下9項目を用いている。

- ①子どもの世話で肉体的に疲れる
- ②子どもにかかりきりで時間的な余裕がない
- ③子どもと向き合っていないければならず、気が休まらない
- ④子どもがいるために、趣味等を気軽に楽しめない
- ⑤親同士のつきあいや人間関係がわずらわしい
- ⑥配偶者等が子育ての大変さを理解してくれない
- ⑦子育てについて相談する相手がいない
- ⑧自分や配偶者等の親や親せきの口出しが多い
- ⑨子どもにかかる金銭的な負担が大きい

分析方法としては、以上の9項目を得点化し、「負担感大：上位（23～36点以下）」「負担感中：中位（19～23点未満）」「負担感小：下位（9～19点未満）」の3類型に分けている。その結果として、次の図表1に示すように、「負担感大：上位（23～36点以下）」は専業主婦が45.3%、共働き家庭の母親が29.1%となっていることから、共働きでない場合の方が負担感が強いと結論づけている¹⁷。

¹² 同上、184頁。原田正文(1993)『育児不安を超えて：思春期に花ひらく子育て』朱鷺書房、94-9頁。

¹³ 原田正文(2006)『子育ての変貌と次世代育成支援：兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防』名古屋大学出版会、186-7頁。

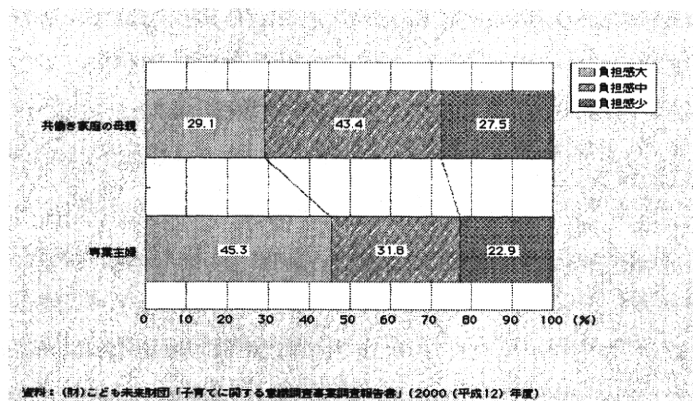
¹⁴ 同上、191頁。なお、ここでの「家庭の経済状況」に関する変数は、「①安定している、②まあまあ暮らせる、③苦しい」の3つである(同上、331頁の調査票より)。

¹⁵ 同上、189頁。

¹⁶ 内閣府(2004)『平成16年度 少子化社会白書』43-4頁。

¹⁷ 財団法人こども未来財団(2001)『平成12年度子育てに関する意識調査事業調査報告書(概要版)』20-3頁。

図表 1 共働き家庭の母親と専業主婦の子育て負担・不安感



出典：内閣府（2004）『平成 16 年度 少子化社会白書』43 頁

第 5 に、21 世紀出生児縦断調査（第 2 回：2002 年度、対象児年齢 1 歳 6 か月）をもとに、母親の就業別に負担感をみた結果、職に就いている場合よりも「無職」（専業主婦）の方が割合が高いことが示されている。また、こうした結果の背景として、「夫や他の家族、あるいは外部からの支援が得られないまま、24 時間乳幼児と向き合って、心身両面で育児に追われる妻の姿がうかがえる」と指摘されている¹⁸。

第 6 に、松田茂樹は東京郊外で調査したデータを用い、親子の基本属性と育児不安の関係を分析している。育児不安度は、牧野らの尺度を用い、「子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある」などの 10 項目について、「よくある」（4 点）から「まったくない」（1 点）までの 4 段階の回答を合計している。分析結果としては、リスクファクターの有無（子どもが病気がちや反抗期等で子育てに手がかかる状態をあらわす変数）と世帯年収が、育児不安を左右している要因であると結論づけている。すなわち、リスクファクターがない場合よりもある場合の方が母親の育児不安は高く、世帯年収が低いと育児不安度が高いと指摘している。この結果から、母親の就労形態によって育児不安度が変わらないと論じている¹⁹。

（3）本稿の視点

以上のように先行研究では、母親自身の意識や経験、夫の意識や行動、あるいは母親の就業状況の観点から育児不安や負担感が考察され、その豊富な調査結果が蓄積されてきた。一方で、階層（学歴や収入面）の観点からの育児不安や負担感の調査研究は、松田茂樹の実証分析などを除き、意外に少ないことがわかった。上述したように、大日向による学歴のクロス、原田による経済状況（安定しているか、ほどほど安定か、苦しいか）のクロス分析があるものの、実際の収入面での分析や学歴別の育児不安・負担感の特徴については、

¹⁸ 同上、43-4頁。

¹⁹ 松田茂樹(2008)『何が育児を支えるのか：中庸なネットワークの強さ』勁草書房、87-8頁。

調査研究の蓄積が少ない現状にあると思われる。

したがって本稿では、母親の就業状況に加え、収入面や学歴といった階層の視点から、育児不安や負担感の変化や特徴について検討することとしたい。

また「育児不安」とは、1節で検討したように「親に向けられる期待と、親が実現している育児の現実とのズレ」から生じるものとされる。ここには2つの前提があると思われる。第1に、親が自分の子育てや暮らし自体を主体的にふりかえる意識や意欲がある、という前提。第2に、自分の暮らしを向上させたいという意識や意欲が親にある、という前提である。

逆にいえば、親が自分の子育てや暮らしを振り返る意識や意欲が弱かったり、余裕がなかったりする場合、あるいは、自分の暮らしを向上させたいと思う意欲や意識が弱かったり、余裕がなかったり、暮らしの向上自体が「どうにもならない」と親があきらめていたら、そもそも親の「期待」自体が低くなる。そして、「期待」が低いため、こうした層の「育児不安・負担感」の数值は低くあらわれる傾向にあるのではないかと推察される。この点は育児不安・負担感をめぐる調査研究にどうしてもつきまとう限界だとも考えられる。

ここで本稿では、自分の子育てや暮らしをふりかえる余裕がなかったり、あきらめてしまう層もあり得るとの前提から、親をとりまく社会経済的構造、ここでは親の階層に着目して、育児不安・負担感を考察することとしたい。

2. 21世紀出生児縦断調査のデータ特性

次に、21世紀出生児縦断調査のデータ特性について確認しておきたい。21世紀出生児縦断調査の第1・2回調査では、「お子さんをもって負担に思うことは何ですか」「子育ての不安や悩みがありますか」というたずね方であったのに対して、第3回調査以降は、「お子さんを育てていて負担に思うことや悩みについて」と統合している。第7回では、「親の悩み」と「子どもについての悩み」を明示的に分けて尋ねている。また、調査の回を重ねるごとに育児負担を問う項目が増え、第4回目以降は19項目、第7回目は親の悩みを15項目、子どもについての悩みは19項目を設定している。

ここで、親の悩みに関する項目について、ごく低い回答率の項目を除いたうえで、いくつかの類型に整理してみよう。

第1の類型として、時間不足感・身体的疲労感・精神的疲労感と位置づけられるのが、「自分の自由な時間が持てない」「仕事や家事が十分にできない」「気持ちに余裕をもって子どもに接することができない」「目が離せないのが気が休まらない」の4項目である。この4項目は、「自分の自由な時間が持てない」は時間不足感、「気持ちに余裕をもって子どもに接することができない」は精神的余裕の不足感といえるが、「仕事や家事が十分にできない」「目が離せないのが気が休まらない」は、時間不足と精神的余裕の不足感が混在した状態ともいえるのでこの類型に位置づけられる。ただし、第7回では「目が離せないのが気が休まらない」は調査項目から外されている。

第2の類型が、「制度の不足感」である。制度の不足感は「子どもを一時的にあずけたいときにあずけ先がない」という保育施設の不足感と、「子どもが急病のとき診てくれる医者が近くにいない」という医療施設の不足感の2項目が該当する。

第3の類型である「経済的負担感」は、文字通り「子育てで出費がかさむ」である。

第4の類型は、「家族間の項目」である。「配偶者が子育てに参加してくれない」については、「配偶者の参加不足感」、「しつけのしかたが家族内で一致していない」は「家族内で子育て方針の不一致」といえる。

第5の類型は、「子ども育ちの不安感（健康面、しつけ・育ち面）」である。この類型に位置づけられるものとして、「子どもが言うことを聞かない」「成長の度合いが気になる」「子どもについてまわりの目や評価が気になる」「しつけのしかたがわからない」「病気がちである」が該当する。

図表2 育児不安・ストレスの項目（21世紀出生児縦断調査）

類型	項目	調査回
①時間不足感 身体的疲労感 精神的疲労感	「自分の自由な時間が持てない」	1,2,3,4,5,6,7
	「仕事や家事が十分にできない」 ^a	1,2,3,4,5,6,7
	「気持ちに余裕をもって子どもに接することができない」	4,5,6,7
	「目が離せないので気が休まらない」	2,3,4,5,6
	「子育てによる身体の疲れが大きい」	1,2,3,4,5,6,7
②制度の不足感 (保育施設、医療施設)	「子どもを一時的にあずけたいときにあずけ先がない」	3,4,5,6,7
	「子どもが急病のとき診てくれる医者が近くにいない」	3,4,5,6,7
③経済的負担感	「子育てで出費がかさむ」	1,2,3,4,5,6,7
④家族間の項目 ・配偶者の参加不足感 ・家族内で子育て方針の不一致	「配偶者が育児に参加してくれない」 ^b	3,4,5,6,7
	「しつけのしかたが家庭内で一致していない」	3,4,5,6,7
⑤子どもの育ちの不安感 (健康、しつけ・育ち面)	「子どもが言うことを聞かない」	3,4,5,6,7
	「子どもの成長の度合いが気になる」	3,4,5,6,7
	「子どもについてまわりの目や評価が気になる」	3,4,5,6,7
	「しつけのしかたがわからない」	3,4,5,6,7
	「子どもが病気がちである」	1,2,3,4,5,6,7
	「子どもが保育所・幼稚園に行きたがらない」	4,5,6

出典：筆者が作成。

注a) 第1回、第2回は「仕事が十分にできない」

注b) 第7回は「配偶者が子育てに参加してくれない」

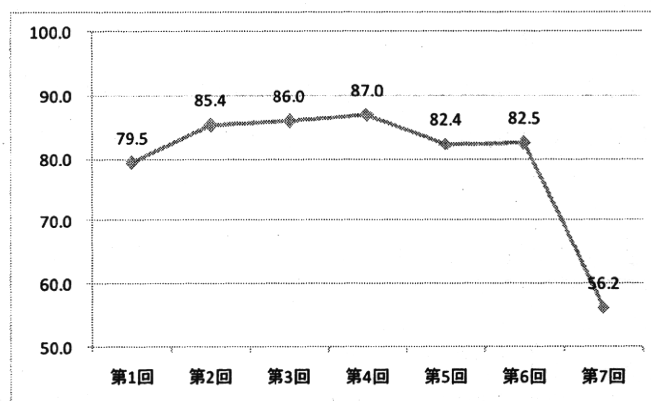
3. 母親の育児不安・負担感の変化

(1) 「負担に思うことや悩みがある」の変化

具体の項目の分析に入る前に、まず「負担に思うことや悩みがある」という「あるか・ないか」自体の変化についてみてみよう。

全体傾向として、もっとも育児負担・不安感が高いピークは第4回の87.0%である(図表3)。

図表3 負担に思うことや悩みがあるか (平均)



兄弟別にみると、全体として、兄弟が1人(=第2子)と兄弟なし(=第1子)の負担・不安感が高くなっている。また、兄弟の数が増えるにつれて、負担・不安感が低い(図表4)。

図表4 負担に思うことや悩みがあるか (兄弟別)

	兄弟なし	1人	2人	3人	4人以上
第1回	79.0	80.5	78.4	78.1	72.4
第2回	85.5	86.1	84.0	80.4	77.2
第3回	86.2	87.2	83.4	78.8	72.4
第4回	87.5	88.2	83.9	79.9	74.2
第5回	83.1	83.8	79.1	74.5	66.0
第6回	82.7	83.7	80.7	76.1	70.9
第7回	59.8	56.9	53.8	49.9	45.2

母親の就業状況別にみると、第1回、2回では専業主婦の負担・不安感が高いものの、第4回以降は就業別の差がほとんどあられていない(図表5)。

図表5 負担に思うことや悩みがあるか (母親の就業状況別)

	家事(専業)	常勤	パート・アルバイト	平均
第1回	80.2	77.4	77.9	79.5
第2回	86.4	83.0	83.7	85.4
第4回	88.3	87.4	86.3	87.0
第5回	84.1	83.0	82.8	82.4
第6回	83.4	82.0	82.6	82.5
第7回	54.8	59.4	57.2	56.2

年収別にみると、第1～7回を通じて、200万円未満の層の負担・不安感がもっとも低くなっている。第2回では、800～999万円の間層の負担・不安感がもっとも高い一方で、第5回以降では、200～399万円の負担・不安感がもっとも高い（図表6）。

図表6 負担に思うことや悩みがあるか（年収別）

	200万円未満	200から400万円	400から600万円	600から800万円	800から1000万円	1000から2000万円	2000万円以上
第1回	76.5	79.8	79.8	80.2	79.3	79.3	79.8
第2回	72.2	86.7	87.5	87.8	89.2	87.3	87.4
第4回	81.8	87.5	87.6	87.8	86.7	86.9	87.1
第5回	73.5	84.7	83.9	83.1	81.8	80.9	78.4
第7回	57.8	59.1	57.7	55.7	53.7	53.7	46.8

母親の学歴別にみると、第1回～6回を通じて、大学・大学院卒の育児負担・不安感がもっとも高くなっている。一方で、第1～3回までは中学卒の育児負担・不安感がもっとも低く、第4・5・6回では高校卒の育児負担・不安感が低くなっている（図表7）。

図表7 負担に思うことや悩みがあるか（母親の学歴別）

	中学校	高校	専門学校・短大・高専	大学・大学院	合計
第1回	78.0	78.8	79.7	82.7	79.6
第2回	82.7	84.7	85.9	87.6	85.4
第3回	84.2	85.7	86.3	87.9	86.2
第4回	87.0	86.0	87.4	88.4	87.0
第5回	83.9	81.8	82.2	84.2	82.4
第6回	82.9	82.3	82.3	83.8	82.6
第7回	62.1	56.5	56.1	54.4	56.2

（2）母親の就業状況と育児不安・負担感の変化

以上の全体の変化をふまえ、次は、育児不安・ストレスの各項目での変化をみてみよう。

（a）3つの変化パターン

第1回～6回の負担・不安感の高低の変化をみると、3つのパターンが浮かびあがってきた。すなわち、子どもの年齢によって負担・負担感が下がる項目、上がる項目、一時点に突出して高い項目、の3パターンである。ここでは引き続き、就業状況別にその3つの変化パターンをみていこう。

子どもの年齢によって負担・不安感が下がる項目

第1回～6回にかけて負担・不安感が低くなっていく、つまり、子どもの年齢によって負担・不安感が下がる項目は、「目が離せないのが気が休まらない」²⁰「子どもが言うことを

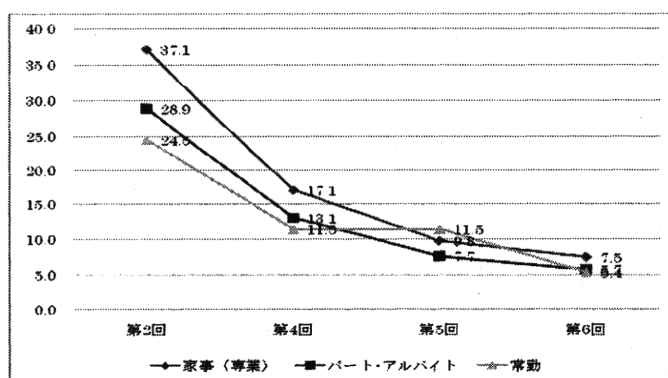
²⁰ 第7回目の調査では、この項目は設定されていない。

聞かない」「子育てによる身体の疲れが大きい」「自分の自由な時間が持てない」である。これらの項目は、就学前において、子どもの成長によって負担・不安感が低くなる傾向にあるものだといえる（図表8①～④）。

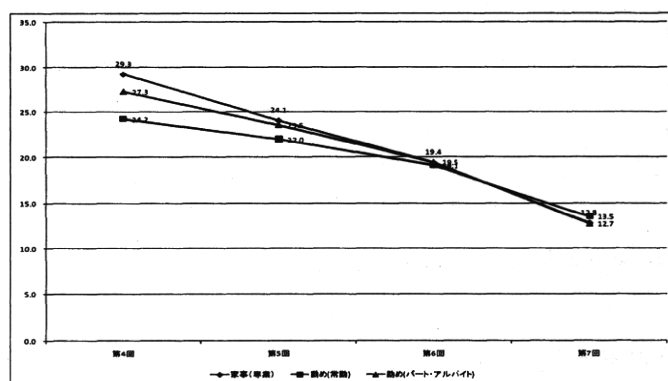
特に「①目が離せないので気が休まらない」は、第2回から第4回にかけて急降下しており、半減以上の変化となっている。それに比べて「②子どもが言うことを聞かない」は、ゆるやかな下降となっている。また、「③子育てによる身体の疲れが大きい」は、第1・2回ではほぼ同程度であったものの、第2回から5回の間で減少傾向にある。さらに、「④自分の自由な時間が持てない」は、第1回から2回にかけていったん上昇し、それ以降は減少傾向にある。

図表8 子どもの年齢によって負担・不安感が下がる項目

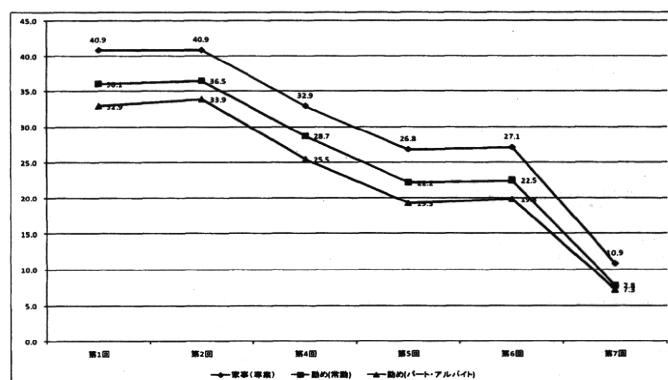
①目が離せないので気が休まらない



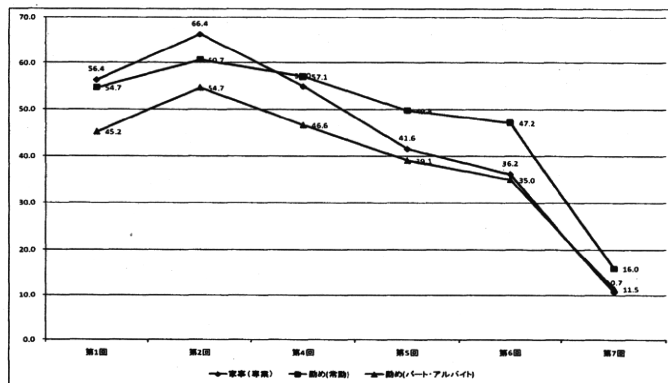
②子どもが言うことを聞かない



③子育てによる身体の疲れが大きい



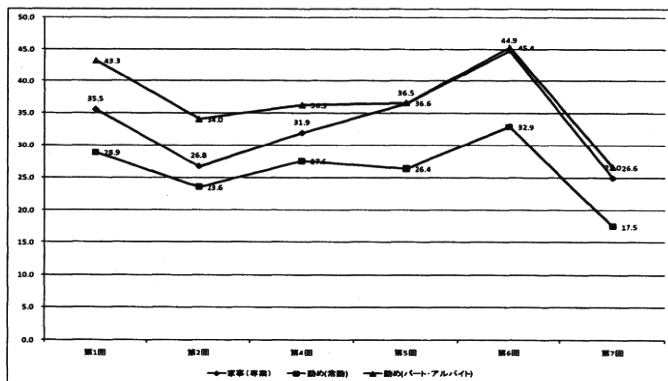
④自分の自由な時間が持てない



子どもの年齢によって負担・不安感が上がる項目

一方で、子どもの年齢が上がるごとに負担・不安感が上がるものは、「子育てで出費がかさむ」である。特に第2回以降から負担・不安感が上がっていることがわかる(図表9)。

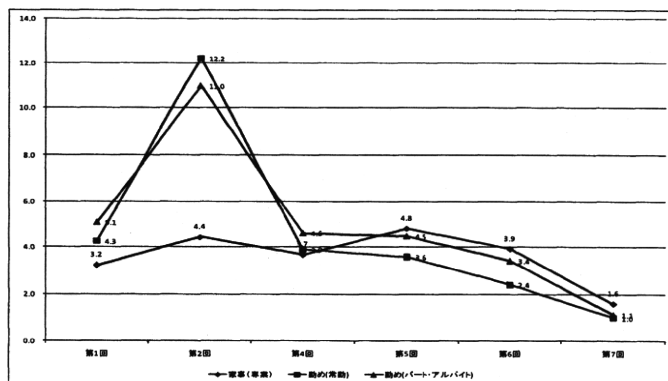
図表9 子どもの年齢によって負担・不安感が上がる項目
子育てで出費がかさむ(第2回以降)



一時点で負担・不安感が高い項目

さらに、一時点のみ負担・不安感が高いのは、常勤、パート・アルバイトの「子どもが病気がちである」(第2回)である。子どもが1歳半くらいになり、保育園にいきはじめるなど環境の変化も関係しているのではないかと推測される(図表10)。

図表10 一時点で負担・不安感が突出して高い項目
子どもが病気がちである



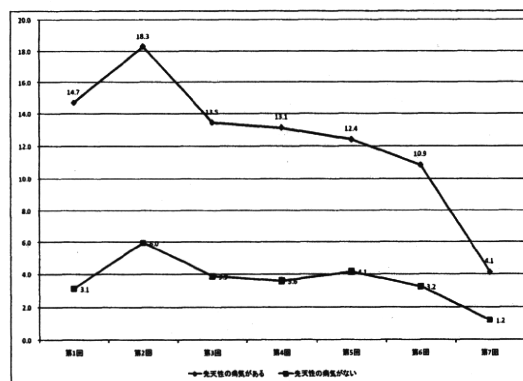
※参考1：「先天性の病気がある・ない」の特徴

上記の子どもが病気がちに関してふみこんでみると、特にその割合が高いのは、子どもに先天性の病気がある場合であることがわかる。ここで「子どもに先天性の病気がある」とは、先天性の病気のために通院または入院した場合を指す。「子どもが病気がち」の割合は、子どもに先天性の病気がある場合とない場合では5倍の差がある（図表 11①）。

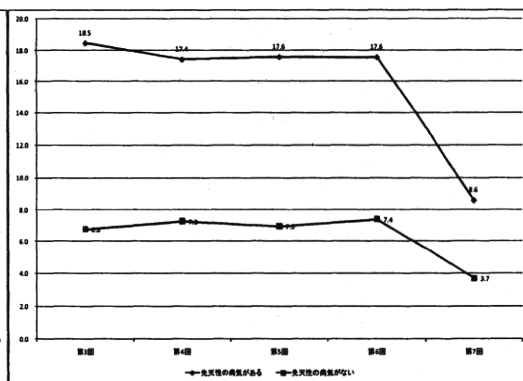
ここでは関連して、「先天性の病気がある・ない場合」についての特徴についてあげておきたい。まず、「成長の度合いが気になる」については、先天性の病気がある場合の方が、ない場合よりも、約3倍割合が高くなっている（図表 11②）。「子どもから目が離せない」「子どもについてのまわりの目や評価が気になる」についても、先天性の病気がある場合の方が、ない場合よりも、同じく割合が高くなっている（図表 11③④）。また、「子育てによる身体の疲れが大きい」「仕事や家事が十分にできない」をみると、第5・6回では、先天性の病気がある場合とない場合とで、その差がひらいている（図表 11⑤⑥）。

図表 11 子どもの先天性の病気の有無別にみた育児負担・不安感の変化（第1～6回）

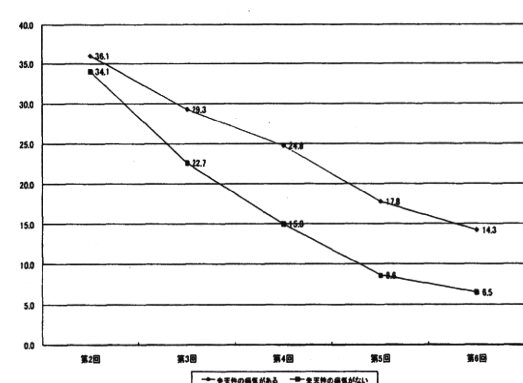
①子どもが病気がちである



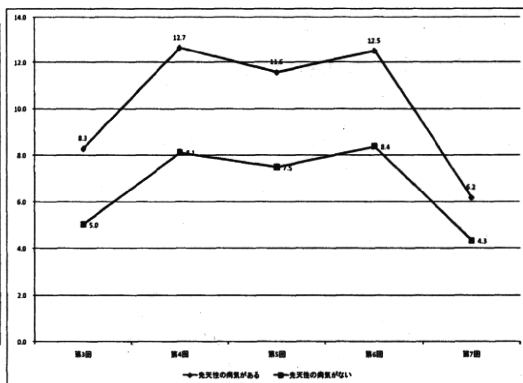
②成長の度合いが気になる



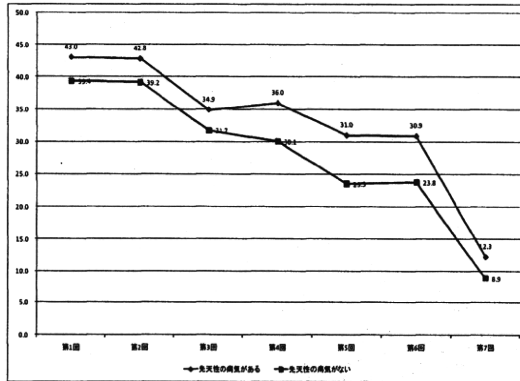
③子どもから目が離せない



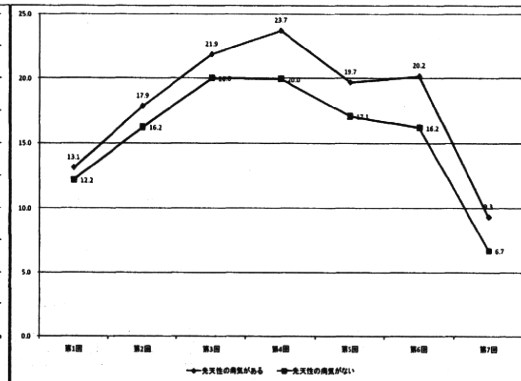
④子どもについてのまわりの目や評価が気になる



⑤子育てによる身体の疲れが大きい



⑥仕事や家事が十分にできない



(b) 母親の就業状況別

先行研究では、「専業主婦が、就業する母親よりも育児不安が高い」ということがいわれてきたが、第1～7回の変化をみると、専業主婦、パート・アルバイト、常勤層のあいだで、育児不安やストレスの変化が異なっていること。したがって、「専業主婦が、就業する母親よりも育児不安が高い」と一概にはいえず、あくまでも女性の就業状況別に育児不安や負担感の状況が異なることがわかる。

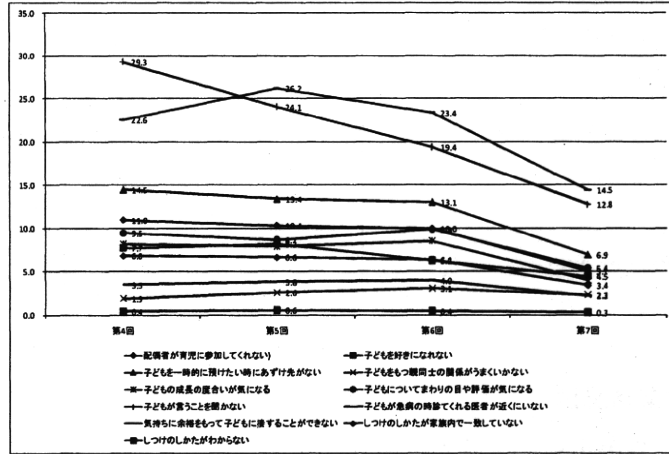
家事（専業）では、第2回「自分の自由な時間が持てない」がピークとなっている。第6回では「子育てで出費がかさむ」がもっとも高くなっている。また、「子どもを一時的に預けたい時に預け先がない」については、パート・アルバイトや常勤と比べて割合が高くなっている（図表12・13①）。

パート・アルバイトの場合、家事専業と同様、第2回「自分の自由な時間が持てない」がピークとなっており、第6回では「子育てで出費がかさむ」がもっとも高くなる。家事専業と異なって、「子育てで出費がかさむ」「仕事や家事が十分にできない」の割合が高い点がパートの特徴である（図表12・13②）。

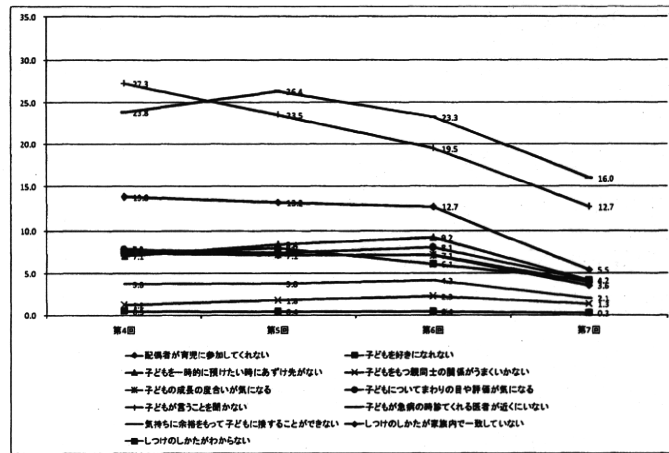
常勤の場合、第1回～7回を通じて「自分の自由な時間が持てない」がトップである。2番目に高いものは、第1・2回では「子育てによる身体の疲れが大きい」、第3・4回が「仕事や家事が十分にできない」、第6回では「子育てで出費がかさむ」となっている（図表12・13③）。

図表 12 就業別にみた育児負担・不安感の変化-1 (第1~7回)

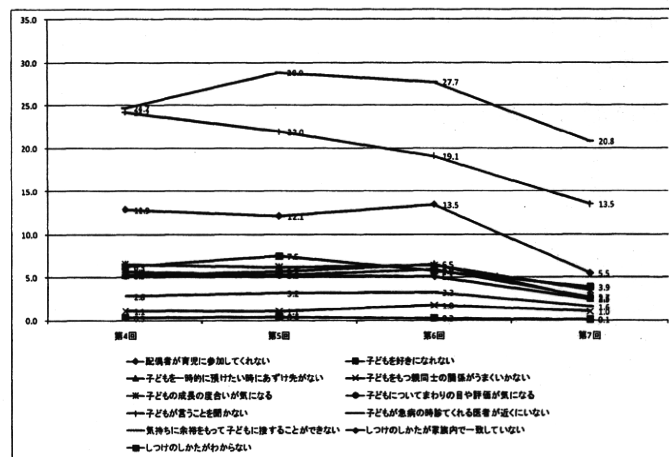
①家事(専業)



②パート・アルバイト

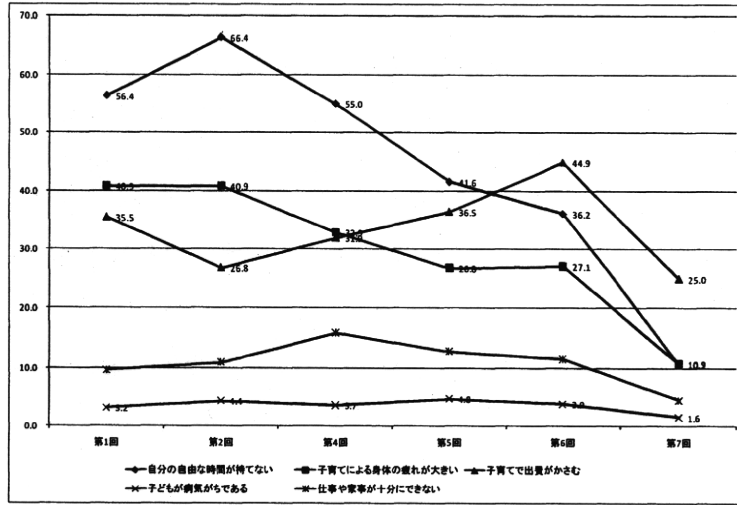


③常勤

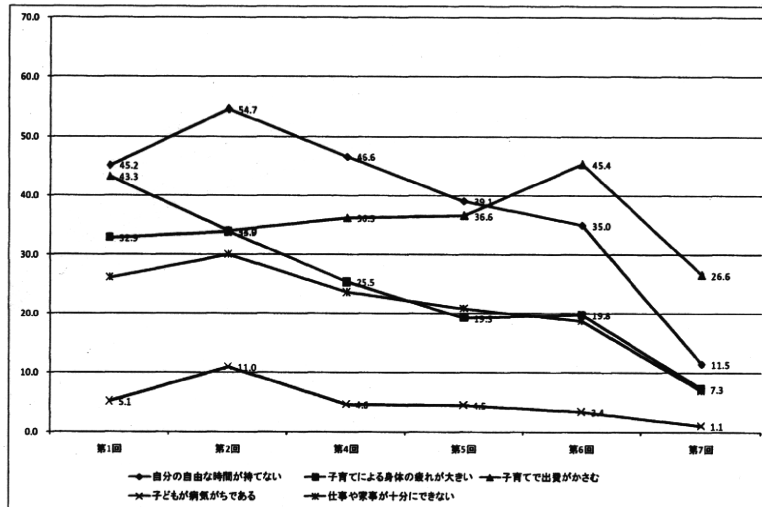


図表 13 就業別にみた育児負担・不安感の変化-2 (第1~7回)

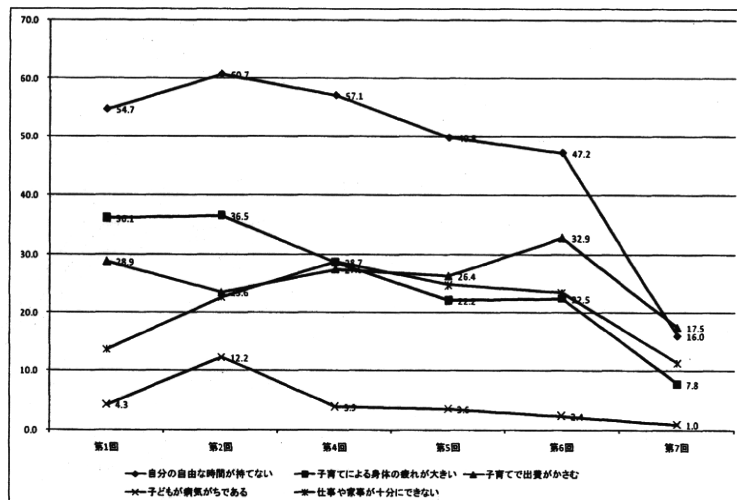
①家事(専業)



②パート・アルバイト



③常勤



(3) 年収・母親の学歴別にみた育児負担・不安感の変化

母親の就業状況よりさらにふみこんで、世帯の年収や母親の学歴に着目して、育児負担・不安感のあらわれ方や変化をみてみよう。

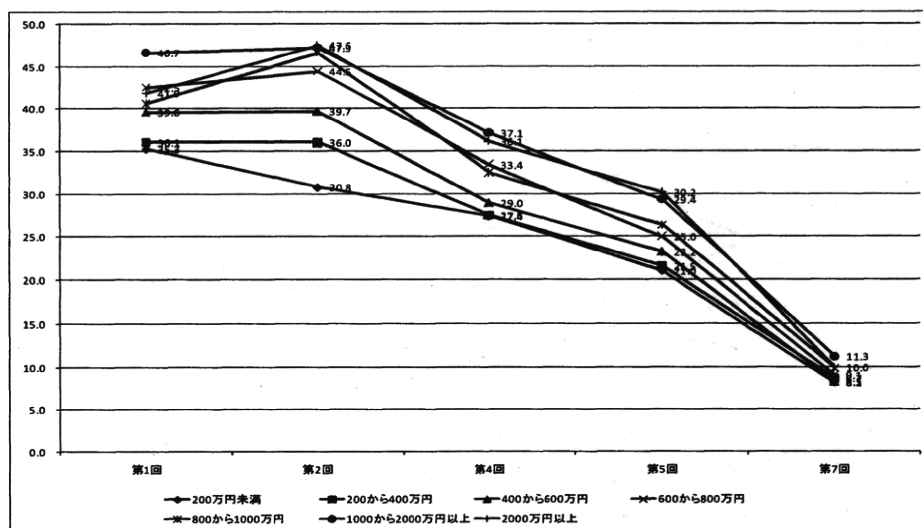
(a) 年収800万円以上や大学卒以上の割合が高い項目

まず、次の図表 14①～③の a に年収別の変化を、b に学歴別の変化を示した。「①子育てによる身体の疲れが大きい」「②仕事や家事が十分にできない」「③自分の自由な時間が持てない」では、年収 800 万円以上の高所得層や、大学・大学院卒以上の層で割合が高くなっている。その一方で、年収 400 万円未満の層や中学卒・高校卒の層では低くなっている(図表 14①～③)。

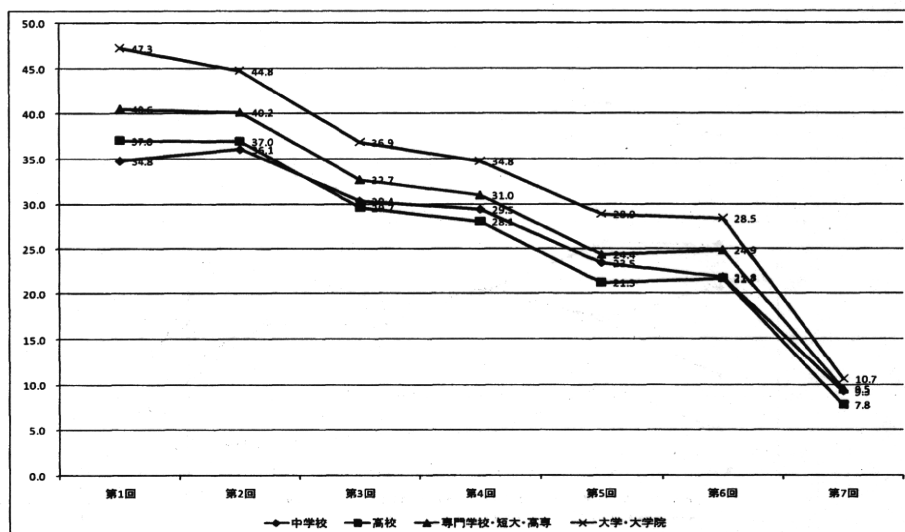
図表 14 階層別にみた育児負担・不安感の変化 (第1～7回)

①子育てによる身体の疲れが大きい

a) 年収別

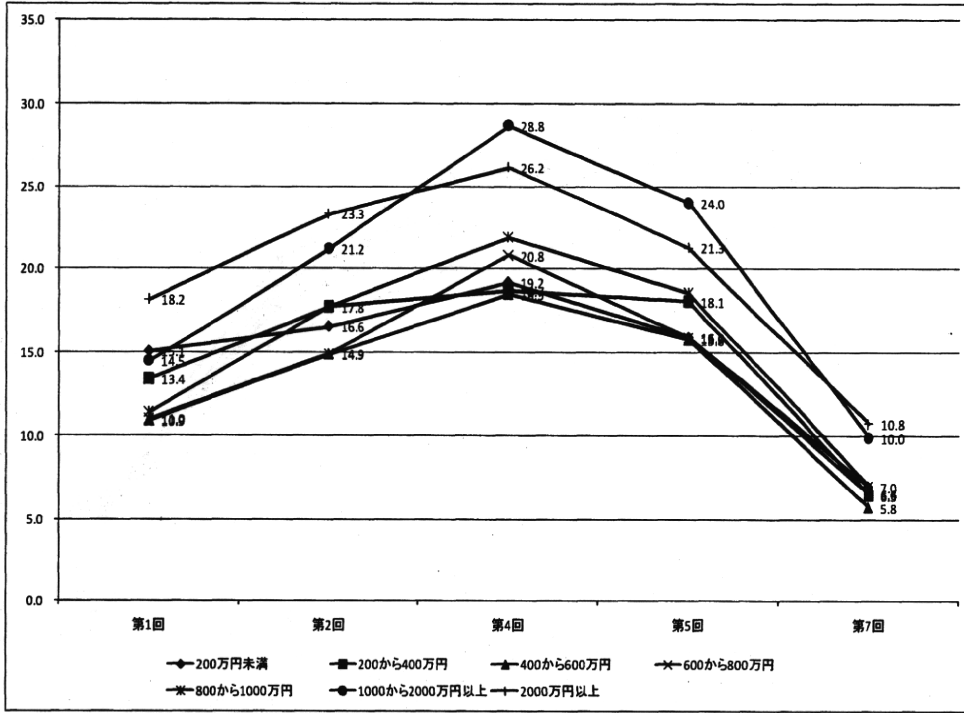


b) 母親の学歴別

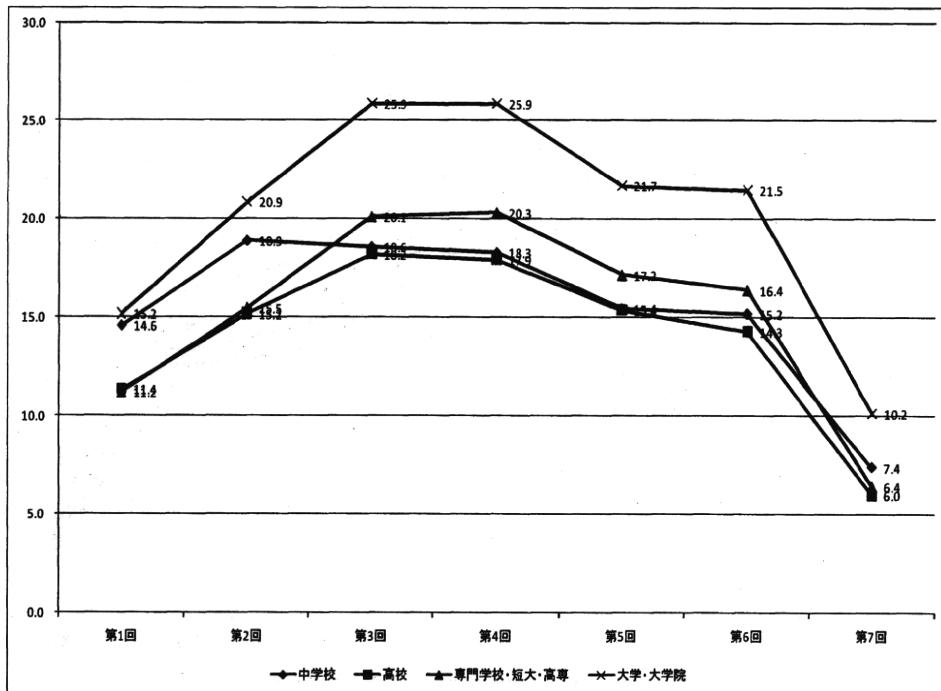


②仕事や家事が十分にできない

a) 年収別

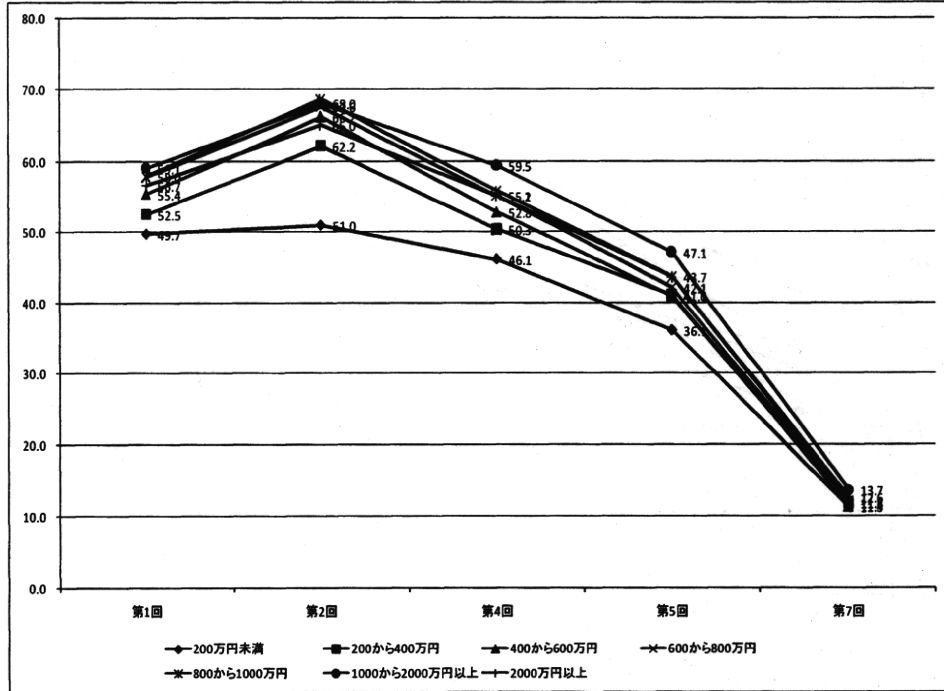


b) 母親の学歴別

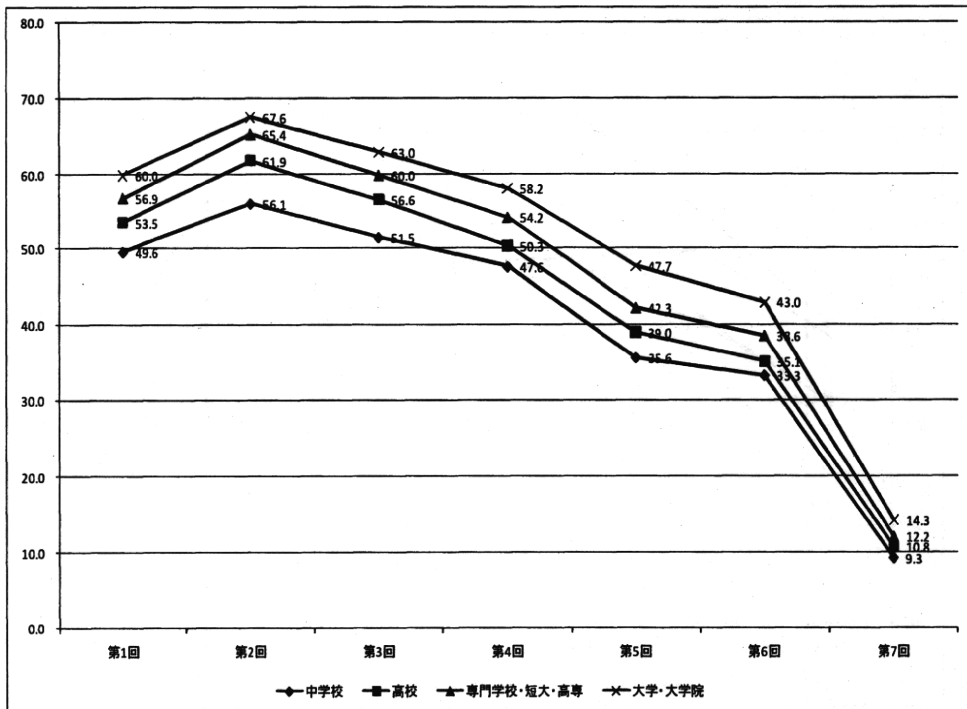


③自分の自由な時間がもてない

a) 年収別



b) 母親の学歴別



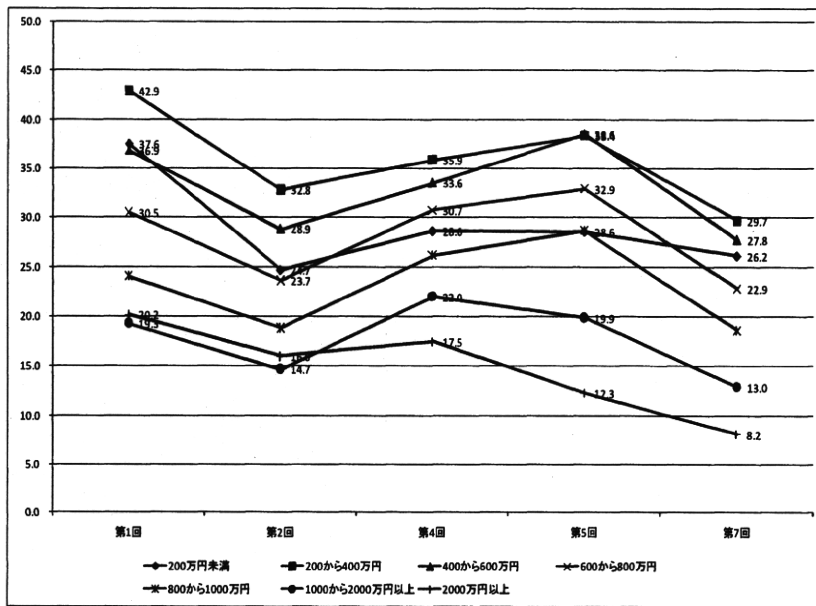
(b) 年収200～599万円、中学卒・高校卒で経済的負担感が高い

逆に、「子育てで出費がかさむ」については、年収 200～399 万円と 400～599 万円の層、学歴では中学卒・高校卒の層で割合が高くなっている。子育てで家計が苦しいという意識が強い層は、この年収 200～599 万円の層、学歴では中学卒・高校卒の層であることがわかる。その一方で、年収 1,000 万円以上の層、大学・大学卒以上の層では低くなっていることがわかる (図表 15)。

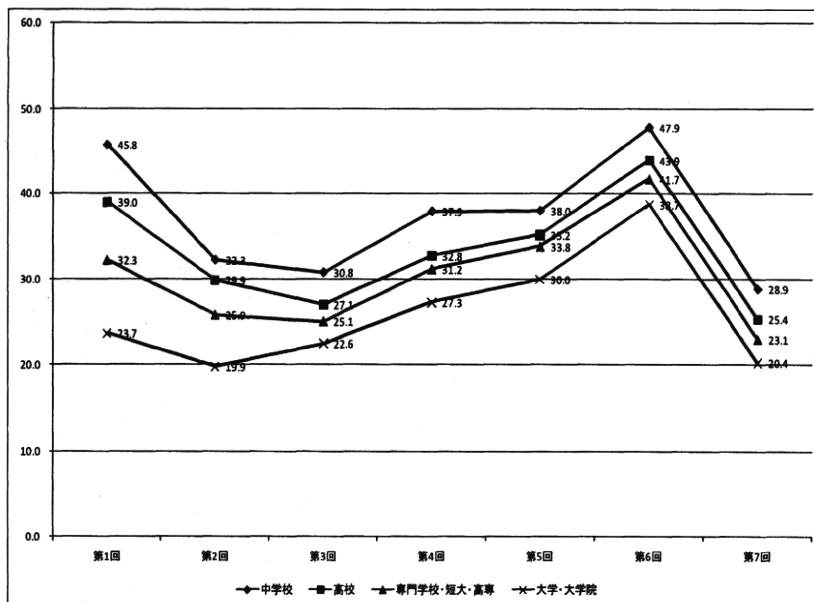
図表 15 階層別にみた育児負担・不安感の変化-2 (第1～7回)

子育てで出費がかさむ

a) 年収別



b) 母親の学歴別



(c) 子どもの行動や育ちに関する不安が高い層は誰なのか

さらに、学歴別にみると、しつけの仕方がわからなかったり、子どもに対するまわりの評価を気にしたりなど、子どもの行動や育ちに関する不安が高いのが、中学卒の層でもっとも高いという特徴が浮かびあがってくる。

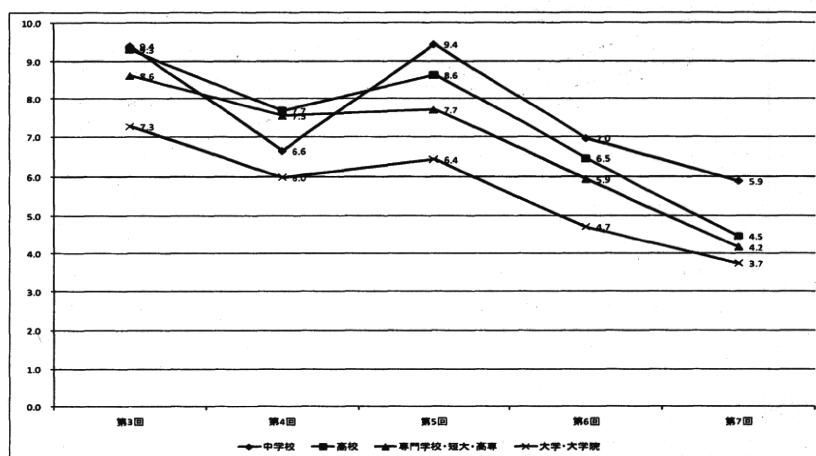
特に第5・6回と子どもが成長するにつれて、「しつけの仕方がわからない」「子どもについてのまわりの評価が気になる」という項目の中学卒の割合が高くなっている(図表16①②)。

また、「子どもから目が離せない」「子どもが病気がち」「子どもが言うことを聞かない」の3つの項目について、継続して中学卒の割合がもっとも高くなっていることがわかる(図表16③~⑤)。

このように、中学卒の層で、周囲の目を気にしたり、子どもから目が離せなかったり子どもが言うことを聞かなかったりするなかで、自分の子育ての方法(しつけの仕方)がわからない、子どもの育ち方について周囲の目が気になっていることがわかる。

図表16 学歴別にみた育児負担・不安感の変化-3(第1~7回)

①しつけの仕方がわからない



②子どもについてのまわりの評価が気になる

